

中世文学資料解題④

星 瑞 穂

はじめに

本稿は『北の丸』五四号（令和四年）掲載の「中世文学資料解題③」に続くものである。当館所蔵の資料のうち、鎌倉時代～室町時代にかけて成立した文学作品（中世文学）および後世に成立したその注釈書類の書誌解題である。広く一般の利用に供するため、作品解説を加えて掲載する。

今回は『改訂 内閣文庫国書分類目録』の「国文」の項目に挙げられている資料から、該当の資料を抽出して調査した。旧蔵者は紅葉山文庫・昌平坂学問所・和学講談所など多岐に及ぶが、近世初期に出版された注釈書も多く含み、中世文学の享受の実態をうかがうことができる。

なお、挿絵を伴う資料については、すでに『北の丸』四五号（平成二五年）～五〇号（平成三〇年）に「当館所蔵の「絵入り本」解題①～⑥」として紹介しているので参照されたい。

【二二一】「玉藻草紙」 江戸時代初期か 一冊

和学講談所旧蔵 「請求番号：特〇六二・〇〇一六」

本資料は室町物語のひとつ『玉藻草紙』（別名に「玉藻前物語」等）の

写本。一冊。

鳥羽院は玉藻前という美女を寵愛していたが、院の病が篤くなり、陰陽師安倍泰成が召し出され、玉藻前の正体を院に害をなす狐と見破った。この狐は天竺・漢土でも王を誑かす悪女となって国を傾けた。やがて狐退治の院宣が下り、上総介・三浦介が下野国那須野で討ち取った。

成立は室町時代前期頃と推定されている。根津美術館が所蔵している絵巻一軸が室町時代後期のもので、最も古態を残すと考えられている。また承応三年には絵入り本として出版された。

本資料は筆跡から見て、江戸時代初期の書写と考えられるもの。また本資料の場合は、狐を討ち取った場面で結ばれ、殺生石伝説は含まれない。

本資料の一丁目には和学講談所の蔵書印があり、和学講談所旧蔵ということがわかる。ただし、それ以前の来歴は不明。

本資料に内題はなく、目録書名は外題を採ったもの。外題は四周双边刷題簽（一六・五糎×三・二糎）の枠内に墨書されており、表紙左肩に貼付。全体に水損あり。表紙は後補か。

【書誌】

外題・「玉藻草紙」左肩四周双边刷題簽（一六・五糎×三・二糎）

内題・なし

見返し・「玉藻草子」と右肩に墨書あり

表紙・斜刷毛目（渋引）表紙（二九・〇糎×二一・五糎）

遊紙・なし

扉・なし

料紙・楮紙

行数・本文每半葉九行

字面高さ・二四・〇糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・三四丁

印記・一才「書籍館印」「内閣文庫」「浅草文庫」「和学講談所」「日

本政府図書

三四ウ「内閣文庫」

【写年・書写者】

本資料には奥書がないため、はっきりとした写年・書写者は不明。筆跡から見て江戸時代初期か。

【二三二】〔十二段草子〕 刊年不明 一冊

和学講談所旧蔵 「請求番号：二〇四・〇〇七三」

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題②」『北の丸』四六号、二〇一四年）参照のこと

【二三三】〔虫歌合〕 写年不明 一冊

和学講談所旧蔵 「請求番号：二〇一・〇二八二」

本資料は室町物語のひとつ『虫の歌合』の写本、別名に『十五番歌合』『虫合』など。袋綴。一冊。

本書は擬人化された虫たちが、一五番の歌合を行うという異類物である。蟋蟀（きりぎりす）の呼びかけに応じて、蟾蜍（ひきがえる）が判者となり、蜂・ゲジゲジ・蟻・はたおり・蓑虫・蠨螂・あしまとい・芋虫・蝶・毛虫・くつわ虫・きりぎりす・蚯蚓・鈴虫・松虫・むかで・きこりむし・ひぐらし・こがねむし・蠅・蛾・蚤・しらみ・けら・蚩・蜘蛛・蟬・蟻・くちなわ、三十四五番で左右に分かれて競い合う。最後は蟾蜍がくちなわに恐れをなして逃げ出す。

江戸時代初期にはすでに本書は刊行されており、当時は木下勝俊（長嘯子）が作者として有力視されていたが、実際のところはつきりしない。成立は室町時代後期〜江戸時代初期と考えられている。

本資料は第一丁目に和学講談所の蔵書印あり。ただし和学講談所以前の所蔵者については不明。

天部に水損あり。

【書誌】

外題・「むしの哥合」左肩無地料紙題簽（一五・七糎×三・三糎）に墨書

内題・なし

表紙・代赭色表紙（二五・〇糎×一七・〇糎）

遊紙・なし

扉・なし

料紙・楮紙

行数・本文每半葉七行

字面高さ・一九・〇糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・一九丁

印記・一才「書籍館印」「内閣文庫」「浅草文庫」「和学講談所」「日本政府図書

本政府図書

【写年・書写者】

本資料には奥書がないため、はっきりとした写年・書写者は不明。筆跡から見て江戸時代前期か。

【一三四】〔虫歌合〕 写年不明 一冊

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号：二〇一・〇三〇四」

本資料は前掲資料同様、室町物語のひとつ『虫の歌合』『十五番歌合』

『虫合』の写本。袋綴。一冊。

表紙は金茶色の絹布を用いており、題簽にも金揉箔を用いるなど、比較的豪華だが、本文は楮の袋綴で、あまり表紙とつり合いが取れていない。

見返しに内閣文庫の蔵書票が貼付されており、修復の際に手を加えられた形跡がある。

第一丁目に「昌平坂学問所」の墨印がある。新収の際に表紙右肩にも同じ印が捺されることが多いが、その形跡は見られず、やはり表紙は後補の可能性が高いと見るべきだろう。

【書誌】

外題・「虫歌合 全」左肩金揉箔料紙題簽（一九・五糎×三・五糎）に墨書

内題・なし

表紙・金茶色（織）表紙（一九・三糎×二〇・五糎）

遊紙・なし

扉・なし

料紙・楮紙

行数・本文毎半葉八行

字面高さ・二二・〇糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・一四丁

印記・一才「日本政府図書」「大学校図書之印」「昌平坂学問所」（墨印）「浅草文庫」

【写年・書写者】

本資料には奥書がないため、はっきりとした写年・書写者は不明。筆跡から見て江戸時代中期〜後期か。

【一三五】〔鳥歌合〕 写年不明 一冊

和学講談所旧蔵 「請求番号：二〇一・〇二八九」

本資料は室町物語のひとつ『鳥の歌合』の写本のひとつで、特に別本に分類されるもの。特に当館以外に所蔵を知られていない。袋綴。一冊。

三〇種の鳥たちが一五番の歌合を催す異類物で、前掲の『虫の歌合』の影響下に成立したものである。

難波の里に隠棲するある翁の夢に、ウグイスが現れて、虫の歌合のように鳥の歌合を催したいという。まずウグイスが判者となり、セキレイとホ

トトギスが左右に分かれて和歌を競う。最後の二五番はワシとウグイスが競い、ワシの勝ちで終わる。

一般的に知られている『鳥の歌合』は、ミソサザイが歌合を催そうとウグイスを誘うが、判者をワシにするためフクロウの仲介を頼むというくだりがある。競い合う鳥も異なっており、三〇種の鳥たちが歌合をするという趣向は同じだが、内容は全く異なっているため、本資料は『鳥の歌合』の中でも特に「別本」と呼ばれる。

和歌はすべて恋が題となり、それぞれの鳥の特徴を詠み込んでいる点も『虫の歌合』を意識したものである。したがって本書は『虫の歌合』の成立以降に作られたものであることがわかる。

本資料の第一丁目には和学講談所の蔵書印があるが、それ以前の所蔵者については不明。

【書誌】

外題・「鳥歌合」左肩無地料紙題簽（一八・〇糎×三・七糎）に墨書
内題・なし

表紙・香色布目型押表紙（二六・八糎×一九・〇糎）

遊紙・左肩に「鳥歌合 蔵」の墨書あり

扉・なし

料紙・楮紙

行数・本文每半葉九行

字面高さ・二二・〇糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・一九丁

印記・一才「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」「和学講談所」

【写年・書写者】

本資料には奥書がないため、はっきりとした写年・書写者は不明。筆跡から見ても、江戸時代中期～後期か。

【一三六】うをのうた合附けた物の歌合 写年不明 一冊

和学講談所旧蔵 「請求番号：二〇一・〇二九一」

本資料は室町物語のひとつ『魚の歌合』の写本で、後半に『獣の歌合』を付すもの。袋綴。一冊。

前掲の『虫の歌合』『鳥の歌合』と一連の作品群を成すもので、『獣の歌合』と合わせて「四生の歌合」とも呼ばれる。

『魚の歌合』の本文にも『虫の歌合』が引き合いに出され、魚たちが左右に分かれて三十番の歌合を催す。判者は鯨の「くじらだんざへもん」。

一番は鯛の「おめでたいゑもん」と鯉の「君を恋のすけ」で、名付けのおもしろさも特徴のひとつである。また判詞が歌学の初学者向けのわかりやすい解説ともなっている。『獣の歌合』は獅子の「しゝわう」が判者を務め、二十番の和歌で左右が競い合う。一番はカワウソの「かわうその水ゑもん」とブタの「ぶたのほうしどろぼう」。内容の近似性から見て、『虫の歌合』が先に成立し、これを受けて『鳥の歌合』『魚の歌合』『獣の歌合』がほぼ同時期に成立したと考えられている。

本資料の場合は、『魚の歌合』と『獣の歌合』の合写。筆跡は同一。判詞の部分は每半葉二一行、字高三・〇糎だが、和歌の部分は字高一〇糎程度でばらつきがある。

一才の蔵書印から見て和学講談所の旧蔵だったことがわかる。裏見返しにスタンプ（三・五糎×〇・八糎）があるが、滲んでいるため判読不可。

(二) ■昭和二〇年二月 / ■文庫「か」ノドにやや水損あり。表紙は後補か。

【書誌】

外題・「魚哥合／猷哥合」 左肩無地料紙題簽（二九・〇糶×三・七糶）に墨書

内題・「うをのうた合」（一才）、「けた物の哥合」（二一才）

表紙・香色布目型押表紙（二七・〇糶×一九・〇糶）

遊紙・なし

扉・なし

料紙・楮紙

行数・本文每半葉二一行

字面高さ・一〇・〇糶〜二三・〇糶

匡郭・無辺無界

墨付丁数・三八丁

印記・一才「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」「和学講談所」

(※裏見返しにスタンプ（三・五糶×〇・八糶）あり)

【写年・書写者】

本資料には奥書がないため、はっきりとした写年・書写者は不明。筆跡から見て、江戸時代中期〜後期か。

【二三七】「あを葉の笛物語」 写年不明 一冊

和学講談所旧蔵 「請求番号：二〇四・〇〇一九」

本資料は室町物語のひとつ『青葉の笛の物語』（別名に『仁明天皇物語』

の写本で、萩原宗固の筆と考えられているもの。一冊。

本書は伝説の名笛「青葉の笛」の由来を語る御伽草子。仁明天皇の御代、在原業平は羅生門で笛を吹く仙童と出会う。業平は仙童に導かれ、箕面の滝の奥の仙境へ赴く。業平は観音菩薩の持ち物だった「青葉の笛」を与えられて都へと戻った。笛は宮中に収められ、帝の命によって業平は再び仙境を目指す。ついに見つけ出すことはできなかった。

名笛の由来譚であると同時に、異界訪問の物語であり、また業平の法華経帰依を讃えるという特徴を持つ。特に仙童が法華経の功德によって永遠の若さを保つというくだりは、菊慈童説話との関連が指摘される。

本資料の場合、第一九丁目に萩原宗固の跋文がある。

表紙は後補で、左肩に題が墨書されている扉が、元表紙と考えられる。

本資料は和学講談所の旧蔵。

【書誌】

外題・「あを葉の笛物語 全」 左肩四周双边刷題簽（一六・五糶×

三・〇糶）に墨書

内題・なし

表紙・代赭色表紙（二三・五糶×一七・〇糶）

遊紙・なし

扉・右肩「続類聚」、左肩「あを葉の笛物語」と墨書あり

料紙・楮紙

行数・本文每半葉九行

字面高さ・一九・〇糶

匡郭・無辺無界

墨付丁数・一九丁

印記・二才「書籍館印」「浅草文庫」「和学講談所」「日本政府図書」

「内閣文庫」

一九ウ「内閣文庫」

【写年・書写者】

第一九丁目に跋文あり。

「此もの語作者詳ならず／詞書三条西殿公国卿絵は土佐／のなにかしか書て一帖をもて／その詞書のみ老のすさみに／影写し侍りぬ公国卿は後公／明公と称しまいらせて円智院（一九才）／内大臣の御事に候て天正十五年／薨し給ふよしものに見えたり／百華庵 宗固云（一九ウ）」

ここでは天正一五年に没した三条西公国（公明、円智院）の手による絵本が底本であるとしている。百華庵は宗固の号。

【一三八】「硯破」 写年不明 一冊

和学講談所旧蔵 「請求番号：二〇四・〇〇八三」

本資料は室町物語のひとつ『硯破』の写本で、特に内閣文庫本と称される伝本。袋綴。一冊。

『硯破』は書写山の僧である性空上人の出家遁世譚。上人がまだ中太三郎と名乗り、朝時大納言という人に仕えていた頃、若君をそそのかして家宝の硯を盗み見した上に、これを取り落として割ってしまう。若君は中太をかばって身代わりとなり、怒った大納言に首を刎ねられてしまった。これをきつかけに、中太は出家遁世して書写山に登ったという。

『硯破』が依拠しているのは『撰集抄』『元亨釈書』『太平記』であることがすでに先学によって指摘されている。

本資料は写年についてははっきりしないが、奈良絵本からの転写であることが推定されている。本資料のほか主要な伝本としては、加藤家本（奈良絵本）、広島大学本（奈良絵本）、細見美術館本（絵巻）などが知られる。特に細見美術館所蔵の絵巻は、足利義澄幼年時の所蔵だったことがわかっている。（小林忠雄「近古小説硯破の成立に関する一考察」『国語国文』二五―四号、昭和三二年、橋本直紀「奈良絵本『硯わり』と性空上人」『千里山文学論叢』二六号、昭和五七年）

本資料は和学講談所の旧蔵。

【書誌】

外題・「硯破」 左肩無地料紙題簽（二八・三糎×三・五糎）に墨書

内題・なし

表紙・香色布目型押表紙（二七・五糎×一九・〇糎）

遊紙・なし

扉・なし

料紙・楮紙

行数・本文每半葉一〇行

字面高さ・二三・〇糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・二五丁

印記・一才「書籍館印」「浅草文庫」「和学講談所」「日本政府図書」

「内閣文庫」

二五ウ「内閣文庫」

【写年・書写者】

本資料の写年・書写者ははっきりしない。

【一三九】三人法師 写年不明 一冊

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号：二〇四・〇〇七〇」

本資料は室町物語のひとつ『三人法師』（別名に『三人懺悔冊子』『三人懺悔の草子』『懺悔物語』など）の写本。袋綴。一冊。

『三人法師』は高野山に隠棲する三人の僧が、出家遁世に至るきっかけを語り合う。第一の僧は恋人を強盗に殺されたこと、第二の僧は強盗となつて罪を思い知つた上に妻のあさましさに嫌気がさしたこと、第三の僧は主君が諫めをきかずに敵に降つたことを懺悔する。最後に三人の僧が名乗り合うと、奇しくも玄松・玄竹・玄梅という揃いの法名だということがわかる。三人はその後、ともに仏道修行に専心した。

文章・構成も巧みで、第一の僧と第二の僧の物語は繋がっており、実は第一の僧の恋人を殺したのは第二の僧で、妻が殺した女の髪を抜いて喜んでいるさまを見て、自らの罪とあさましさを思い知つて出家したという展開になつている。「御伽草子中の屈指の佳作」（松本隆信 『三人法師』『日本古典文学大辞典』）と評されることも多く、これをきっかけに後世の『高野物語』『七人比丘尼』『二人比丘尼』など、懺悔物語と呼ばれる一連の作品群を生むことになる。

本資料の表紙右肩および最終丁には「昌平坂学問所」の墨印があり、かつ最終丁の「元治甲子」の朱印によれば、元治元年に昌平坂学問所に新収されたものであると推定される。

本資料の第一丁目には登場人物の記載があり、「三人法師」の書名のほか別名に「さんげ物語」と載せている。

全体にやや虫損あり。

【書誌】

外題・三人法師 全 左肩打付墨書

内題・なし

表紙・金茶色布目型押表紙（三三・五糎×一六・五糎）

遊紙・なし

扉・なし

料紙・楮紙

行数・本文每半葉八行

字面高さ・一八・五糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・四六丁

印記・表紙右肩「昌平坂学問所」

一才「日本政府図書」「内閣文庫」「浅草文庫」

二才「内閣文庫」

四六才「昌平坂学問所」「内閣文庫」「元治甲子」

【写年・書写者】

本資料の写年・書写者ははっきりしない。

【一四〇】〔四十二〕物争 写年不明 一冊

林家旧蔵 「請求番号：二〇一・〇二八〇」

本資料は室町物語のひとつ『四十二の物争ひ』（別名に『たけくらべ草紙』『春秋優劣物語』等）の写本。袋綴。一冊。

舞台は「奈良の帝」（平城天皇）の御代、帝が春秋の優劣を問いかけたことをきっかけに、公卿殿上人、女房たちが四二のもの優劣を和歌で競

い合う。最初は「月の夜と雪の朝」で、以降四二首が詠進され、一一首に点が付けられた。やがて管絃などの宴が始まり、人々は明け方まで楽しんでだ。

平安時代前期に時代を設定した創作の歌合である。絵や虫、花など具体的なものを左右で比べ合う遊戯を「物合」とするのに対し、本書のような概念的・抽象的なものを競い合うのを「物争い」とする。

判詞に基本的な歌語の解説が加えられるなど、本書は和歌の初学者、貴族の子女向けに作られたものと考えられる。成立は室町時代中期と考えられており、主要な伝本としては特に東京国立博物館の絵巻が知られている。本資料は本文第一丁目に「林氏蔵書」の印があり、林家の旧蔵であることがわかる。また表紙右肩と本文末尾に「昌平坂学問所」の墨印があることから、林家から昌平坂学問所に所蔵が移ったことがわかる。内題はなく、表紙左肩に打付書で「四十二物争」とあり、目録書名はこの外題に基づくもの。

【書誌】

外題・「四十二物争」左肩打付墨書

内題・なし

表紙・代赭色横千筋縞表紙(二四・〇糎×一六・〇糎)

遊紙・なし

扉・なし

料紙・楮紙

行数・本文每半葉八行

字面高さ・一八・五糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・一六丁

印記・表紙右肩「昌平坂学問所」

一才「日本政府図書」「内閣文庫」「浅草文庫」「林氏蔵書」

一六才「昌平坂学問所」「日本政府図書」「内閣文庫」

【写年・書写者】

本資料の写年・書写者ははっきりしないが、筆跡からみて江戸時代前期〜中期か。

【一四二】四十二のものあらずひ 文政二年序刊 一冊

内務省旧蔵 「請求番号：二〇一・〇三〇九」

本資料は御伽草子『四十二物争』の注釈書(一般的な書名は『四十二物争考證』)の版本。袋綴。一冊。

まず「提要」の部分で、成立年代や諸本について論じている。次いで本文を記載し校合、さらに頭注を加えている。この底本は大石千曳蔵写本で、校合に用いたのは古活字版・貞享二年版・写本七種で、行間に諸本間の異同を記している。

編者の山本明清は、天保八年に没した国学者で、岸本由豆流の門下で古典研究の業績を多く残した。本資料の序文もまた岸本由豆流が寄せたものである。

目録書名は内題を採ったもの。外題は一般的な書名である『四十二物争考証』になっている。

第二丁目に「明治十二年購求」の印が捺されており、政府によって購入されたものであることがわかる。全体に水損あり。

【書誌】

外題・「四十二物諍考證 完」左肩四周単辺刷題簽（一九・五糎×四・〇糎）

内題・「四十二のものあらそひ」

表紙・縹色唐花唐草文様艶出表紙（二六・五糎×一五・〇糎）

遊紙・なし

扉・なし

料紙・楮紙

行数・序文八行、提要一五行、本文二一行

字面高さ・序文一九・五糎、提要二四・二糎、本文二六・五糎、頭

注七・〇糎

匡郭・提要・本文四周単辺（二四・二糎×一五・〇糎）

墨付丁数・二二丁

印記・一才「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「明治十二年購求」

【刊年・刊行者】

序文には「文政つちのとの卯」の字が見え、これによれば文政二年の刊行ということになる。ただし、刊記に刊年の記載はなく、後刷の可能性が高い。

刊記は裏見返しに京・大坂・江戸の三都の書肆が載る。

「書肆／京都三條通升屋町／出雲寺文次郎／同寺町通松原下ル／勝村治右衛門／大坂心齋橋通北久太郎町／河内屋喜兵衛／同安堂寺町／秋田屋太右衛門／江戸日本橋通老丁目／須原屋茂兵衛／同本町通横山町老丁目／出雲寺萬次郎／同芝神明前／岡田屋嘉七」

【一四二】 くらいとさうし 江戸時代初期刊 一冊

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号：特二〇・〇〇〇二」

※拙稿 「当館所蔵の「絵入り本」解題②」（『北の丸』四六号、二〇一四年）参照のこと

【一四三】 紫式部の巻 明暦四年刊 一冊

内務省旧蔵 「請求番号：二〇三・〇〇七四」

※拙稿 「当館所蔵の「絵入り本」解題②」（『北の丸』四六号、二〇一四年）参照のこと

【一四四】 一もときく 刊年不明 三冊

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号：二〇四・〇〇九八」

※拙稿 「当館所蔵の「絵入り本」解題②」（『北の丸』四六号、二〇一四年）参照のこと

【一四五】 松風むらさめ 万治二年刊 一冊

鹿都部真顔旧蔵 「請求番号：二〇四・〇〇七二」

※拙稿 「当館所蔵の「絵入り本」解題②」（『北の丸』四六号、二〇一

四年) 参照のこと

【二四六】はちかづき 寛文六年刊 二冊

内務省旧蔵 [請求番号:二〇四・〇〇九六]

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題②」(『北の丸』四六号、二〇一四年) 参照のこと

【二四七】はちかづきさいしやうの君 刊年不明 二冊

昌平坂学問所旧蔵 [請求番号:二〇四・〇〇九六]

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題②」(『北の丸』四六号、二〇一四年) 参照のこと

【二四八】堀江物語 寛文七年刊 三冊

内務省旧蔵 [請求番号:二〇四・〇〇七六]

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題②」(『北の丸』四六号、二〇一四年) 参照のこと

【二四九】(窓の教) 写年不明 一冊

和学講談所旧蔵 [請求番号:二〇四・〇〇八二]

※拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題②」(『北の丸』四六号、二〇一四年) 参照のこと

【二五〇】横座坊物語 写年不明 一冊

和学講談所旧蔵 [請求番号:一九三・〇五二二]

本資料は御伽草子『横座坊物語』(一般的には『横座房物語』)の写本。袋綴。一冊。

本書は仔牛の「横座房」を巡る物語で、ある老僧が「横座房」と呼んで可愛がっていた仔牛が横領されてしまう。犯人は旧知の悪太郎という人物で、名前を呼んで仔牛が返事をすれば返してやるといふ。そこで老僧は、和漢の故事・説話を引き合いに出し、どんな生き物にも情けの心があると説くと、果たして仔牛の「横座房」は「もう」と返事をしたという。

狂言「横座」と同材だが、前後関係は不明。室町時代前期の成立と考えられている。

物語の主眼は老僧の引く故事・説話である。動物を巡るあらゆる故事・説話が網羅されている。またこの老僧はかつて山名氏清に從った武者だったとして『明德記』を典拠にしているのも特徴的である。

本資料は漢文体で記されている。当館のほか、神宮文庫などの伝本が知られるが、本資料と同文。『室町時代物語大成 一三』の底本は本資料である。(徳田和夫「動物に宣命を含める話——お伽草子『横座房物語』論

その1 『国語国文論集(学習院女子短期大学)』二五号、平成八年、同
「もの言う動物の話——お伽草子『横座房物語』論(承前)——」『国語国
文論集(学習院女子短期大学)』二六号、平成九年

本文冒頭に「和学講談所」の印あり。

【書誌】

外題・「横座坊物語」左肩無地料紙題簽(一八・〇糎×三・五糎)

内題・「横座坊物語」

表紙・金茶色布目型押表紙(二七・〇糎×一九・二糎)

遊紙・なし

扉・左肩「横座坊物語」墨書

料紙・楮紙

行数・一〇行

字面高さ・二〇・〇糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・二〇丁

印記・二才「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」「和学講談所」

「内閣文庫」

二〇ウ「内閣文庫」

【写年・書写者】

本資料には奥書がないため、はっきりとした写年・書写者は不明。

『室町時代物語大成 一二』に解題あり。

【二五二】「清悦物語」 写年不明 一冊

和学講談所旧蔵 「請求番号：二〇四・〇一三七」

本資料は一般的な書名を『清悦物語』『衣川合戦清悦物語』とする物語袋綴。一冊。

源義経とその家臣たちが最期を遂げた衣川合戦を、その場で共に戦い、生き延びた清悦という人物が、伊達政宗らを相手に合戦の有様を物語って聞かせるというもの。本書はこの話を聞いた小野太左衛門が筆録したという形式を取る。

清悦は山伏の力によって不老不死の身となり四〇〇年の齢を経た人物。彼は知られざる衣川合戦の様子を伊達政宗たちに語る。義経の首を見て涙した頼朝の話、また共に義経に仕えた常陸坊(海尊)も不老不死となって生き延びたこと、弁慶や佐藤兄弟は義経と共に葬られたことなど、正史とされる衣川合戦から逸脱した様々な伝説が語られる。

成立年代・作者ともに未詳。文中に清悦・常陸坊死去の年を寛永七年と述べていることから、本書が現行の内容になったのは近世に入ってからのことである。

これらについて須田学氏は「清悦、常陸坊(海尊)、八百比丘尼といった長生の異人が昔見聞した義経・弁慶の物語を語ったという伝説は平曲、奥浄瑠璃の流布、修験山伏・座頭・熊野比丘尼の関与を想起させる」と指摘する。但し、須田氏も指摘している通り、本書の場合は語り物として流布した形跡よりも、読み物として転写されて伝わった形跡のほうがはっきりしている(須田学『清悦物語』『昔話伝説研究』二二号、二〇〇〇年)。例えば、国立国会図書館蔵本(文化一四年写)は、本資料からの転写である。

本資料は物語の写本としては大型で高さ三〇・〇糎程度。筆跡から見て江戸時代初期から前期の写か。第一丁目と最終丁の汚損が目立ち、表紙を欠いていた時期があると見え、現在の代楮色の表紙は後補と考えられる。

本資料の第一丁目に和学講談所の蔵書印がある。

【書誌】

外題・「清悦物語」左肩打付墨書

内題・なし

表紙・代赭色表紙(三〇・〇糎×二一・〇糎)

遊紙・なし

扉・なし

料紙・楮紙

行数・九行

字面高さ・二六・五糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・一五丁

印記・一才「浅草文庫」「和学講談所」「内閣文庫」「日本政府図書」

一五ウ「内閣文庫」

【写年・書写者】

本文末尾(一五ウ)には次の通り、奥書がある。

「此書は／元和元年／村田御曹司／右衛門様の御内／御小姓／小野
太左衛門殿記之／近郷氏求之」

ただし、この部分は横幅一糎程度、もとの本文料紙に新しい紙
で継ぎ足したものと見られる。

(調査員)